



## 『病』は市に出せ

園長 野中 泉

先日、遠方の友人にアトムでの日々を話していたら唐突に彼が「『病』は市に出せだね」と言いました。初めて聞く言葉に、「何それ？」と聞き返した私に彼はこんな文献を教えてくださいました。

いまや、毎年3万人前後も人が自ら命を絶つといわれる日本ですが、自殺が少ない地域にはどんな特徴があり、自殺を予防するどんな要素が導き出されるのか、全国でもきわめて自殺率が低いと知られる徳島県海部かいふ町（現・海陽町）とその周辺地域で住民たちに聞き取り調査をした研究書（※）が2003年に出版されているのだそうです。冒頭の言葉について書かれている箇所を紹介します。

海部町に古くから伝わる言葉。「病」は病気だけでなく、家庭や仕事などにおける人生のあらゆる問題を指す。「市」は市場、公開の場のこと。病気や悩みなどは早めに大っぴらにすれば、だれかが助けてくれるという意味だ。

瀬戸内海の遠い町で古くから伝えられてきたその言葉は、教えてくれた友人のいうとおり、私たちアトムの日常そのものだと感じました。というより、その言葉を「ほんとうのこと」にしたいと仲間とアトムで奮闘する日々だと言った方がしっくりくるでしょうか。

もうひとつ、この海部町の研究で、興味深いと感じたことがありました。冒頭の言葉のように「悩み相談は恥ではない」と感じられている町は、きっと家族のように濃厚な人間関係が存在しているのだろうと思いきや、想像に反して近所づきあいについてのアンケートによると「日常的に生活面で協力しあっている」のは、近隣で自殺率が高いA町の44%に対し、海部町は17%と大きく下回っているのです。

海部町のつきあいで多いのは「立ち話程度」と「あいさつ程度」の付き合いに集中している。

あまりに濃密な人間関係が固定すると、弱音を吐きづらくなる。「監視社会」「ムラ社会」の生きづらさだ。海部町のある住民は「よそから来た人に関心は持つ。でも、関心と監視とは違う」と話したという。ゆるやかな結びつきが「生き心地の良さ」を生む。

人間関係が希薄ということではなく、ゆるやかな結びつきだからこそ弱音が吐けるという考察に妙に納得すると共に、「関心と監視は違う」という言葉にも、ハッとさせられます。アトムでは「お母さんにも、先生にも言わないで」と立ち寄った卒園児がポロリと本音をもらしてくれることが時々あります。子どもたちだけでなく、送り迎えのふとした立ち話のような場で、「仕事を辞めたい」「離婚しようと思う」「家族に重い病気がみつかった」などとても重い秘密を大人から打ち明けられることも少なくありません。なんで、他人の私たちに打ち明けてくれたのかと不思議に思うのですが、もしかしたら、重い秘密や深い苦しみのいくつかはアトムがその問題の渦中の場（学校や職場、家庭）ではなくて、ほどよい距離感を保つ別の場所だからこそ、言えたことなのかもしれません。

人生には、ひとりでは、どうしたって乗り越えられないような大きな苦しみや途方もない難題が時折やってきます。乗り越えて踏み留まれた人と、そうでなかった人の差はどこにあったのでしょうか。いつの間にか、自殺が交通事故死や病死を超えて死亡理由の1位にまでなってしまったこの国のために、小さな町の小さな保育園でしかないアトムでできることは本当に小さい。それでも、いや、だからこそ、明日もこの場所から、覚えたばかりのこの言葉をかけ続けたいと思うのです。「『病』は市に出せだよ。きっと誰かが助けてくれるから、話してみよ」と。

※参考文献「生き心地の良い町～この自殺率の低さには理由わけがある～」岡檀著